

独立戦争から内戦にかけてのアイランドのナショナリズム

独立戦争から内戦にかけてのアイランドのナショナリズム

—『麦の穂をゆらす風』のアイランド人兄弟に表象される  
アイデンティティの模索とイデオロギーの闘争—

法学部法律学科 4 年 L 組

南部希美

序章

*The Wind that shakes the Barley* (Ken Loach、2006、邦題：麦の穂をゆらす風)<sup>1</sup>は、1920年代のアイランド南部コーク州<sup>2</sup>を舞台に、架空の人々を通して、当時のアイランド人ナショナリストたちの様相を描いたフィクション映画である。タイトルの *The Wind that shakes the Barley*<sup>3</sup>はアイランドの伝統的な民謡であり、*the Barley* は英国の弾圧に対して決して屈しないアイランドの抵抗を象徴している<sup>4</sup>。物語の中心人物はデミアン (Demian、弟) とテディ (Tedy、兄) という青年兄弟である。彼らは、1919年から始まる独立戦争でアイランド義勇軍として共に戦うも、1921年の英愛条約締結後、1922年から始まる内戦によって敵同士になってしまう。

内戦時の分裂の背景には、当時のアイランドに存在していたアイデンティティやイデオロギーを含むナショナリズムの対立がある。本論文は、デミアンとテディが、当時の相反するナショナリズムを表象する存在として描かれており、映画全体を通してアイランドのナショナリズムの変遷を描いているという仮説を基に構成している。

本論文においては、基本的に、1801年の合邦前にアイランド王国だった範囲を「アイランド」、1919年の独立戦争でアイランドが闘った相手を「英国」と表記する。「アイランド」とは、合邦後のアイランド王国、アイランド共和国 (暫定政府)、アイランド自由国、も指す。一方「英国」とは、アイランドを除く連合国であり、実質的には大英帝国、英国政府を指す。加えて、条約賛成派とIRA正統派、条約反対派とIRA暫定派、フィニアンとIRBは、それぞれ同義である。また、イースター蜂起以前のアイランド義勇軍および地方の「義勇軍」もIRAとして紹介している。

また本作品を扱うにあたり、監督のケン・ローチ (Ken Loach、1936-) がアイランド人ではなく、ウォリックシャー州出身のイングランド人であること<sup>5</sup>は、明記しておかねばならない。彼自身はケルト系の文化精神を受け継ぐ存在ではなく、あくまで外野の視点からアイランド人の物語を描いている。

まず、本作品が扱うアイランドの1801年から1927年までの歴史を概観する<sup>6</sup>。

1. Ken Loach *The Wind that shakes the Barley*, United Kingdom, 2006, 2016年のCannes Film Festival. で the Palme d'Or 受賞。

2 コークは、内戦期に条約反対派であるIRA暫定派の中核部隊が駐留した州であり、また内戦はコーク北方のファーモイ兵舎陥落を最後に初期段階が終結した。森ありさ『アイランド独立運動史—シン・フェイン、IRA、農地紛争—』論創社、1999、86頁、131頁

3 Dwyer Joyce, *The Wind That Shakes the Barley*, 1861

4 David Damrosch, *The Longman Anthology of British Literature: The Twentieth Century*, The Longman Anthology of British Literature (Longman, 2011) p. 285

5 Bert Cardullo, *Loach and Leigh, Ltd. : The Cinema of Social Conscience* (Cambridge Scholars Publishing, 2010) pp.119-120

6 年号等の史実に関しては、特別な注釈があるところを除いて以下の年表を参考にした。堀越智『アイランドの風土と歴史』論創社、1982、42-53頁

19世紀初頭の1801年、合同法(Acts of Union 1801<sup>7</sup>)によりアイランド王国(Ríocht na hÉireann, Kingdom of Ireland)はグレート・ブリテン王国(Kingdom of Great Britain)と合邦し、グレート・ブリテンおよびアイランド連合王国(United Kingdom of Great Britain and Ireland)が誕生する。1800年の合同法によりアイランド史上初の立法府であるアイランド議会(Parliament of Ireland)が廃止される。19世紀半ばから、アイランドではナショナリズムの興隆と共に英国からの独立を要求する運動が現れた。当初の独立運動は、相対的独立、つまりは自治要求であった<sup>8</sup>。したがってアイランドでは、自治を目指す国民党(Home Rule Party, Irish Parliamentary Party, アイランド議会党)が支持され、英国との交渉に臨んでいた<sup>9</sup>。1858年、ジェームズ・スティーブンス(James Stephens, 1825-1901)とオドノヴァン・ロッサ(Jeremiah O'Donovan Rossa, Diarmaid Ó Donnabháin Rosa, 通称:オドノヴァン・ロッサ、実名:ジェレミア・オドノヴァン、1831-1915)によってフィニアン運動が起き、フィニアン(Fenian, Fenian Brotherhood, IRB, Irish Republican Brotherhood、アイランド共和主義者同盟)が設立された<sup>10</sup>。その後1865年と1867年にフィニアンによる65年蜂起と67年蜂起が起き<sup>11</sup>、67年蜂起の際にフィニアンによる「共和国宣言」がなされる。1868年、アイランド総選挙が行われる。1869年、アイランド国教会制度が廃止。1877年、IRBが議会主義運動支持をやめると決議。1905年、アーサー・グリフィス(Árt Ó Gríofa, Arthur Griffith, 1871-1922)がシン・フェイン政策を発表。1908年ナショナリスト党のシン・フェイン(Sinn Féin)が結成。1913年、アルスター義勇軍(Ulster Volunteer Force, UVF)が結成。これを受けて、同年、アイランド義勇軍が結成。1914年、アイランド自治法案(Home Rule Act 1914)<sup>12</sup>が可決される。しかし折しも、第一次世界大戦が勃発していたため、実施は大戦終結後まで延期された。この情勢の中で、アイランドではアイランド共和国として連合国から独立することを主張するシン・フェイン党が国民党よりも支持を得るようになり、完全独立の共和主義を支持する国民世論の急激な転換が起こった<sup>13</sup>。1916年、再建された元IRBの軍事部門である共同アイランド共和軍(a joint Irish Republican Army)を中心に、パトリック・ピアース(Pádraig Anraí Mac Piarais, Patrick Henry Pearse)率いるアイランド義勇軍、ジェームズ・コノリー(Séamas Ó Conghaile, James Connolly)率いるアイランド市民軍等、独立を支持する人々がアイランド共和国(Poblacht na hÉireann

<sup>7</sup> *Acts of Union*, 1st January 1801

<sup>8</sup> 後藤浩子ほか『比較経済研究所研究シリーズ24 アイランドの経験—植民・ナショナリズム・国際統合—』法政大学出版局、2009、8頁

<sup>9</sup> 同上、森ありさ「第12章 自治から共和主義への転換点」、11頁

<sup>10</sup> 鈴木良平『IRA アイランド共和軍—アイランドのナショナリズム—』彩流社、1999、75頁

<sup>11</sup> オフェイロン著、橋本楨矩訳『アイランド—歴史と風土—』岩波書店、1993、170頁

<sup>12</sup> *Home Rule Act 1914*, 18<sup>th</sup> September 1914

<sup>13</sup> 後藤、前掲書、8頁

または Saorstát Éireann、Irish Republic) の樹立を宣言し、イースター蜂起 (Éirí Amach na Cásca、Easter Rising) と呼ばれる武装蜂起を行った。この武装蜂起を機に、アイランド義勇軍は IRA (Irish Republican Army) と名称を変える。蜂起はまもなく鎮圧され失敗したものの、1918 年総選挙で劇的勝利を遂げたシン・フェイン党は、1919 年ドイル・エアラン (Dáil Éireann) という名で知られるアイランド国民議会を革命議会として開く。1921 年ドイル・エアランの議長のエイモン・デ・ヴァレラ (Éamon de Valera、正式名: Edward George de Valera, 1882 - 1975) は、自らを議長から共和国大統領へと昇格させ、義勇軍を正式にアイランド共和国軍と改称し<sup>14</sup>、ゲリラ戦を独立戦争と主張して英国との交戦権を主張した。アイランド自由国の独立が宣言され、ここに共和国臨時政府が誕生する。これがアイランド独立戦争の始まりである。

この頃から各地方の「義勇軍」も IRA と呼ばれるようになった。1920 年 3 月、ブリテンは反革命テロリスト集団「ブラック・アンド・タンズ (Black and Tans、正式名: Royal Irish Constabulary Special Reserve)」をアイランドに送り込んで IRA の鎮圧を計った。1921 年 6 月、英愛条約が結ばれ、北部 6 州を除く南部 26 州は大英帝国国王を願主とする自治領「アイランド自由国」として分離することが決定し、1922 年アイランド自由国は連合王国を離脱する。しかし、講和内容が完全な独立ではなく英国領内の自治国にとどまっていたことおよび北アイランド 6 州が自由国に含まれていないことから、アイランド国内は条約賛成派 (IRA 正統派) と条約反対派 (IRA 暫定派) に分裂した。英国は IRA 正統派の自由国政府に IRA 暫定派の鎮圧するよう圧力をかけ、自由国政府は自らの手で IRA 暫定派を弾圧しなければならなくなった<sup>15</sup>。自由国軍は、かつての英軍のブラック・アンド・タンのような役割を演じ、英軍の援助を受けて、IRA 暫定派を弾圧した<sup>16</sup>。1922 年 6 月から、激しい内戦が繰り広げられた。条約賛成派の IRA 正統派は、英国から、給与、武器、装備などを与えられ兵舎に住んで自由国軍となった<sup>17</sup>。一方で条約反対派の IRA 暫定派は、無給与の志願兵の集まりであった<sup>18</sup>。それにもかかわらず、英国との休戦後から、条約反対派の志願兵は急増していった<sup>19</sup>。内戦は 1923 年 4 月まで続き独立戦争を遥かに超える死者を出した<sup>20</sup>。

---

14 当時のアイランド義勇軍は地方の「義勇軍」も含めて、パートタイムの私服のゲリラ部隊であり、通常は普通の民間人として暮らしていたが、独立戦争の深化と共に、30 人程度のプロの遊撃隊に変わっていった。鈴木、前掲書『IRA アイランド共和軍—アイランドのナショナリズム—』、75 頁

15 同上、85 頁

16 同上

17 同上

18 同上

19 同上

20 一方、19 年 1 月から 21 年の休戦までに、アイランドでは 752 人が死亡、866 人が負傷した。22 年 9 月から 23 年 7 月末までの間で 665 人の志望 3000 人の負傷。同上、81 頁、86 頁

1927年、連合王国はグレート・ブリテンおよび北アイランド連合王国（United Kingdom of Great Britain and Northern Ireland）と国号を改めた。

次に、本作品の概要を記述しておこう。

1920年、アイランドの南部に位置するコーク州の青年デミアン（Damien O'donovan）は、ロンドンで医師の職に就くことが決まっていた。出発の前日、武装警察隊ブラック・アンド・タンズにより、デミアンの恋人シネード（Sinéad）の弟ミホール（Michael）は武装警察隊に殺害される。葬式後、デミアンはブラック・アンド・タンズとのゲリラ戦のためにこの街にとどまっていたと IRA に所属する友人に懇願されるが消極的な態度を見せ、ロンドンへ行く決心をする。

出発の日、ロンドン駅のホームで、デミアンはダン（Dan）という初老の鉄道運転手に出会う。ダンは乗車しようとする英国兵に対し労働組合の方針を理由に乗車を頑なに拒否していた。英国兵に暴力を振るわれながらも、英国兵に屈しないダンを見て、デミアンはロンドン行きを取りやめ、IRA に参加する決意をする。

IRA の主要メンバーはデミアンの兄テディ（Tedy O'donovan）であった。デミアンはテディらと共に、フィンバー（Fin Barre）という人物の支持の下、英国人を殺害しゲリラ戦に明け暮れる。しかしついに英国軍にアジトを突き止められてしまう。身柄を拘束されたデミアンは、英国軍に紛れ込んでいたアイランド青年の協力により脱走に成功する。帰還後、デミアンはシネードからの情報で、デミアンの幼馴染クリス（Chris）が、IRA のアジトの情報を英国軍に売った裏切り者であったことを知る。裏切り者の処刑命令を受けたデミアンは葛藤しながらも、クリスを銃殺する。

1921年12月英国はアイランドに停戦を申し入れ、英愛条約が締結される。条約内容をめぐって、条約反対派の IRA についてのデミアンと条約賛成派の自由国軍についてのテディは敵味方に分裂し、かつての同胞を互いに殺害し合う壮絶な内戦へと巻き込まれていく。そしてついに、デミアンは自由国軍側に捉えられ、その処刑を任されたテディは、デミアンを銃殺する。

第1章 アイデンティティの源流—ケルト人意識

第1章および第2章では、テディとデミアンの有するアイデンティティについて取り扱う<sup>21</sup>。

まず、章を進める前に、主人公の名前「デミアン」の意味することについて指摘したい。デミアンと言えば、ヘルマン・カール・ヘッセ (Hermann Karl Hesse, 1877 - 1962) の *Demian: Die Geschichte von Emil Sinclairs Jugend*<sup>22</sup> (1919, 邦題: デミアン - エーミール・シンクレールの少年時代の物語<sup>23</sup>) という小説が思い浮かぶ。この物語は、エーミール・シンクレールという少年が、デミアンという不思議な少女に出会うことで真の自己を見つける話である。物語の内容に関して幾つか類似点があることから、ケン・ローチが本小説を多少なりとも意識していることは想像に難くない。そこでここでは、物語の背景にあるカール・グスタフ・ユング (Carl Gustav Jung, 1875 - 1961) の「元型<sup>24</sup> (Archetypus)」という概念について触れておく。

ユングの「元型」は分析心理学における概念で、全人類に普遍的に共通する、集合的無意識の中に仮定された原子心像を指す<sup>25</sup>。それは、意識的経験の素材によって満たされる時に、その内容によって決定されるものであるが、セルフ、シャドウ、アニマ、アニムス、ペルソナ、父、母、子供、老賢者、英雄、少女、詐欺師、等のパターン (元型) に分類されており、これらが一個人の中に無意識下で共存している<sup>26</sup>。この概念は、デミアンという小説にも活かされており、すなわち、シンクレールが自己発見をしていく過程で出会うデミアンを始めとする人物は、実はシンクレール自身の内面を表象したものなのである。

<sup>21</sup> アイデンティティがナショナリズムに内包されることについては、『映画とネイション』で述べられている以下の定義を参照する。すなわち「ナショナリズムは、「リベラリズム」や「ファシズム」よりは、「親族関係」や「宗教」に属すると仮定した方がわかりやすいだろう。そこで、人類学的精神によって、ネイションを次のように定義しよう。ネイションとは、イメージとして心の中に創造された政治的共同体 (an imagined political community) である。そして、それは、本来的に限定されたもの、かつ最高の意思決定主体として想像される<sup>21</sup>。中略、ゲルナーはそれと比類できる論を敢然と展開する。「ナショナリズムは、ネイションが自意識的に目覚めることではない。ナショナリズムは、もともと存在していないところにネイションを発明することだ<sup>21</sup>」加藤幹郎監修、杉野健太郎ほか『映画とネイション』ミネルヴァ書房、2010、9頁。本論文では、「親族関係」や「宗教」に由来するアイデンティティもナショナリズムであり、また「リベラリズム」や「ファシズム」に代表される政治的イデオロギーもナショナリズムとしている。

<sup>22</sup> Hermann Karl Hesse, *Die Geschichte von Emil Sinclairs Jugend*, Fischer Verlag, 1919

<sup>23</sup> ヘルマン・ヘッセ著、高橋健二訳『デミアン - エーミール・シンクレールの少年時代の物語』岩波文庫、1939

<sup>24</sup> Anthony Storr, *Jung* (HarperCollins, 1973) pp.33-34

<sup>25</sup> *Ibid*, p.34

<sup>26</sup> *Ibid*, pp.35-55

本映画において主人公が「デミアン」と名付けられたことの背景にも、この元型の概念があるのではないだろうか。すなわち、デミアンもテディもその他の人物たちも、全てひとつのアイデンティティ、すなわち「英国に対抗するアイランド人」というアイデンティティに内包された、もしくは派生した違う側面を持つ人々だということである。そしてこのことは、デミアンとテディが兄弟であるという設定にも活かされているように思われる。

したがって、本論文では、デミアンやテディに共通するアイデンティティとしての「ケルト人意識」から始め、次に階級や宗教によるアイデンティティの対立、そして政治的イデオロギーの対立という順に、論を進めていく。

アイランドは、世界で唯一のケルト民族の国家でありながら、地方ごとの文化も多様であり、さらにノルマン人（ヴァイキング）やイングランド人（ゲルマン民族）の侵入の歴史を理由に、しばしばアイデンティティ研究の対象になる。田中によれば、アイランド人にネーション意識が芽生えたのは11世紀のことで、マンスター出身のブリーアン・ポールヴァがアイランド島を統一し、続いて『アイランド来寇の書<sup>27</sup>』というアイランド人の起源伝説を編集した出自神話書が登場したことで、アイランド全島に共通したネーション意識が形成された<sup>28</sup>。そして12世紀後半にイングランド人が侵入してくると、アイランド人はイングランド人を「他者」として扱った<sup>29</sup>。

考古学的・文献的に跡付けられるケルト人居住区とケルト語使用圏域とは、必ずしも一致していない<sup>30</sup>。アイランドが「ケルト」文化の正当継承者を自認・自称するのは、歴史的にみると必ずしも正しくなく、むしろケルト人意識は、近現代におけるアイランドの反英独立運動の結果として、民族主義の中で生まれた新しい「起源」神話であるという見方が一般的である<sup>31</sup>。つまり、アングロ・アイリッシュ的なものとゲーリック的なものとの相克の歴史の中で、アイランドは、自らのアイデンティティのよりどころとして、「ケルト」概念を作り出した<sup>32</sup>。

ライアンによれば、アイランドには過去300年間に少なくとも4つの文化が存在していた。イングリッシュ、ゲーリック、アングロ・アイリッシュ、長老教会である。これら

<sup>27</sup> R.A.S.Mascalister, *Lébor Gabála Éirenn: The Book of the Taking of Ireland*, 5 vol, (Irish Texts Society, 1993)

<sup>28</sup> 後藤、前掲書、田中美保「第1章 中世アイランドにおける「ネーション」意識」23頁

<sup>29</sup> 田中美穂「12世紀後半アイランドへのノルマン侵攻—ディアルミド・マクムルハダニヨルストロングボウ招喚」『エール』第25号2005年135-150頁

<sup>30</sup> 原聖『ケルトの水脈』講談社、2007、21頁

<sup>31</sup> 後にアイランド人政治家のムーディーは1977年に行った講演で、このような民族主義的ケルト人意識を「宿命論的民族意識 (predestinate nation)」と名付け、「民族的神話」として、そこからの脱却を主張した。T.W.Moody, "Irish History and Irish Mythology", in Brady, op, cit, pp 84-85

<sup>32</sup> 同上、331-332頁

は対立する文化として、アイランド内に混在しており、その分断されたネイション意識は、本作品が描く 20 世紀前半にも当然色濃く続いていた。20 世紀前半、この 4 つの異なる文化の中では、アングロ・アイリッシュが一番強力であり、それに拮抗する形でゲーリック (=ケルト) が存在していた<sup>33</sup>。

ここで一度、19 世紀初めのアイランド人のナショナリズムとして 19 世紀のナショナリストを代表する人物の一人であるオーヘガティ (Patrick Sarsfield O'Hegarty、Pádraig Sáirséal Ó hÉigeartaigh、1879-1955) の次の言葉を紹介する。

「アイランド王国が建国された時、グレート・ブリテン王国はなかった。イングランド王国さえなかった。イングランドの土地が単なる地方の諸王、小王、副王たちが生き残ろうと支配権を求めて争い合っている芝生にすぎなかった時、アイランド王国は既に存在していた。しかし、1801 年にグレート・ブリテン王国と合併したのは、この古い、歴史的な王国ではなかった。もう一つのアイランド王国があったのである。すなわち、歴史的な王国と違って、力によって強制され、力と力が生み出したものによって維持されてきた王国だった。1801 年にグレート・ブリテン王国と合併したのはこの王国だった。この王国だけだった。古い王国は、その合併とは全く別に存在していたのである。1801 年に終わった王国は、1169 年のアングロ・ノルマン人の侵入に根源を持つ王国だった。それは力によってアイランドに強制され、維持されたのだった。デーン人やその後のノルマン人がアイランドを支配したようには、イングランド人はアイランドを全面的に征服することはできなかった<sup>34</sup>。」

この言葉は、合併時のアイランドを理解する上で、非常に示唆に富んでいる。すなわち、仮に形式上は合併されたとしても、ケルト意識は持続しており、アイランドを英国とは完全に違うと捉える民族主義か、英国の一部と捉える国際主義かの違いがあったにしても、あくまでもイングランドとは違うアイランド人という意識は共有されたままだったのである。

さて、このような流れの中で、1916 年のイースター蜂起は、それまでの英国的でアングロ・アイリッシュなものを駆逐し、民族主義的でゲーリック的なものを回復しようとする、独立革命であり<sup>35</sup>、この時期から、アイランド人の民族主義的なケルト人意識が強く表面化してきた。この時期のアイランド人の願いは、イースター蜂起の指導者オドノヴァン・ロッサの “Not free merely, but Gaelic as well; not Gaelic merely, but free as well”<sup>36</sup> という言葉によく表れている。また同様に、デミアンとテディが所属した IRA (Irish Republican

<sup>33</sup> 鈴木良平、『IRA アイランド共和軍—アイランドのナショナリズム—』彩流社、1999、3 頁

<sup>34</sup> Patrick Sarsfield O'Hegarty, *A History of Ireland Under the Union 1801-1922*, 1952, p.113

<sup>35</sup> 鈴木、前掲『アイランド建国の英雄たち—1916 年復活祭蜂起を中心に—』、3 頁

<sup>36</sup> O'Donovan Rossa Graveside Oration, P. H. Pearse, *Collected Works, Political Writings and Speeches*, p.135



Army) にも、その名称の中にも、アイランド人のケルト人意識と独立革命の悲願を端的に読み取ることが出来るだろう。すなわち、まず、第一にアイリッシュ的 (=ゲールック的) であるということ。つまり、英国流ではなく、カトリックであり、ケルト民族であるアイランド人の伝統に根ざしたものに戻りたいという民族的願望。第二に、共和主義者であること、つまり英国から完全に独立した、アイランド語などを話す共和国を樹立することである<sup>37</sup>。このケルト意識、ゲールック文化に対するこだわりは、臨時政府樹立の際の政策にも見受けられた。革命後はゲールック語が国語にされ、ゲールック化、カトリック化、共和国の樹立、と次々に民族主義路線が敷かれるようになったのである。

さて、上記のような「ケルト意識」は、本作品内では次のような3つの場面で表れる。

まずは、冒頭、ハーリングに興じるところから始まることに注目したい。ハーリングは、ケルト人神話の中で特別な意味を持つ<sup>38</sup>。一般に『侵攻の書』として知られる『アイランド征服の書』の記述によれば、アイランドン異界に住むトゥアッハ・デ・ダナンと呼ばれる女神ドヌの部族が移民であるフォーモール族に戦いを挑んだ際に使用したとされるのが、ハーリングである。このことから、ハーリングは英国への闘いのシンボルともなった<sup>39</sup>。さて、このケルト人意識をデミアンとテディが共有していることは、冒頭のハーリングによって表されている。ハーリングはアイランド人のゲールック文化に対する誇りと、英国に対する闘争心の両方を示しているのである。

そして次が、ミホールとブラック・アンド・タンズとの争いの場面である。ブラック・アンド・タンズに名前を聞かれたミホールは、英語名で答えるように要求されたにもかかわらず、決して英語でミケールと自分の名前を発音せず、アイランド語でミホールと主張し続ける。そのことによってミホールはブラック・アンド・タンズに殺されるが、ミケールの友人たちは彼を「英雄」だと褒めたたえる。

そして最後がミホールの死後、葬式の際に謳われる *The Wind that shakes the Barley* の意味である。これは本作品のタイトルにもなっている。

"*The Wind That Shakes the Barley*"は、1861年に英文学者であり、アイランド詩人でもあった Robert Dwyer Joyce (ロバート・ジョイス、1836-1883)によって作詞されたもので、1798年のアイランド反英闘争を題材に創作している。アイランドへの愛国心と英国への復讐心が書かれており、内容は恋人を殺された若者が義勇軍に入り、イギリスへの反乱に向かうというものである<sup>40</sup>。

<sup>37</sup> 鈴木、前掲『IRA アイランド共和軍—アイランドのナショナリズム—』、4頁

<sup>38</sup> プロインシャス・マッカーナ著、松田幸雄訳『ケルト神話』青土社、1991、107-144頁

<sup>39</sup> 池上正太『ケルト神話』新紀元社、2011、58頁

<sup>40</sup> 第1節の歌詞は以下の通りであり、恋人への愛とアイランドへの愛が書かれている。

"My sad heart strove the two between the old love and the new love. The old for her, the new that made me think on Ireland dearly." そして第2節の歌詞ではイギリスという

Barley とは、軍人が食料として行進の際にポケットに麦を入れていたことに由来し、同時に、毎年春に繰り返し育つことから、英国に決して屈せず鎮圧されても何度でも立ち上がるアイランドの闘争心を表している。

本章で明らかになったように、本作品の冒頭は「ケルト人意識」の強調、そしてアイランド人が民族意識の下「英国に対する闘争心」を共有していたことが強調される作りとなっている。ではこのような、同じ民族意識、闘争心を持っていた彼らが、なぜ分裂を起こしたのかについて、次章以降で取り扱う。

---

異国の鎖を屈辱的に思う若者が義勇軍に参加する決意をする。“(I) harder still to bear the shame of foreign chains around us. And so I said, "The mountain glen I'll seek at morning early and join the brave united men". While soft wind shook the barley”

## 第2章 アイデンティティの分裂—階級と宗教

本作品において、デミアンとテディがケルト人意識を共通のアイデンティティとして有していることは前章で説明した通りである。しかし、アイデンティティという点で考えるならば、この両者の言動には、看過できない違いがある。それが、階級意識と宗教観である。

本作品は、19世紀から20世紀にかけてのアイランドが抱えていた階級と宗教の問題を兄弟に表象させている。すなわち、両者は兄弟という設定でありながら、デミアンは生粋のゲーリック的人物として描かれており、一方でテディはアングロ・アイリッシュ的人物として描かれているのである。

では、本作品の検討に入る前に、当時のアイランドにおける階級の問題について説明する。

20世紀のアイランドにおいて、アングロ・イングリッシュが最も優勢であり、それに拮抗する形でゲーリックが存在していたことは、前述の通りである。それは、階級と宗教を反映した結果でもあった。アイランドにおいて、アングロ・アイリッシュは、上流階級から支配階級に位置する。彼らはアイランドに生まれながらも、英国人の血統であり、社会背景、教育、家系の繋がりなどを理由に、アイランドを英国の一部だと感じていた。彼らは乗馬やラグビーなどのスポーツを愛好し、ダブリンのトリニティカレッジで、プロテスタントの支配階級としての教育を受けた<sup>41</sup>。彼らは、規律を順守し一定の限界内で服従する文化であり、またプロテスタントは文明のシンボルであるという考えの下、カトリックに対して優越感を持っていた<sup>42</sup>。一方で、ゲーリックは、無産階級から労働者階級に位置する。彼らは民族主義的で、英国とは違うという意識を強く持っており、宗教もカトリックであった<sup>43</sup>。アングロ・アイリッシュから見ると、ゲーリックは、規律がなく、乱脈で、荒れ狂う文化であり、またカトリックに対しては不潔で、怠け者で、儉約心のない、信頼のおけない、無知で野蛮というイメージを抱いていた<sup>44</sup>。

しかし、独立戦争期の反英運動と共和国樹立による政治家や指導者の誕生、そして産業抑制政策<sup>45</sup>により、一部の裕福なゲーリックが誕生した。同時にカトリック刑罰法により、

<sup>41</sup> 鈴木、前掲『IRA アイランド共和軍—アイランドのナショナリズム—』、4頁

<sup>42</sup> 同上、3頁

<sup>43</sup> 同上、4頁

<sup>44</sup> 同上、3頁

<sup>45</sup> 産業抑制政策とは、1868年に始まった英国によるアイランドの産業規制政策である。アイランドの多くの産業に打撃を与えたが、英国との間に競争関係がなかったリンネン工業と畜産加工工業だけは、むしろ利益が増加した。そして畜産加工品によって栄えたのがコーク州である。牧畜業者や食品貿易商人の大部分はカトリックであり、彼らはいわば豊かなカトリックだった。しかし、彼らは政治活動も経済活動も制限されており、その利潤がアイランド農業の発展に投資されることはなかった、コークに独特の戦闘的なナシ

カトリック内には分裂が起こっていた<sup>46</sup>。

ブラウンの指摘するように、一般には民族と階級は、多くの場合で対立する概念として使われる。しかし、アイランドにおいては、上流層のナショナリストと労働者層のナショナリストが激しい抗争を繰り広げながら、独立の際には、労働者層が裏方にまわり、上流層を表面にたて、実際は重要な役割を果たしながら表面上は上流層と一線を画しているようなポーズをとるという独特の関係を築いていた。

それが英愛条約をきっかけに、両者の思想の違いが明確になる。すなわち、アングロ・アイリッシュ主義的なアイデンティティをもつ上流層とゲーリック主義的なアイデンティティをもつ労働者層とに分裂した<sup>47</sup>。前者である IRA 正統派は国際主義的な社会主義路線を唱え、アイランドは既に西欧の先進諸国の仲間入りを果たしたと考え、西欧社会主義諸国との連帯を目指した。後者である IRA 暫定派は地域主義的な民族主義路線を唱え、アイランドは発展途上国の段階であるとし、第三世界との連帯を強調した<sup>48</sup>。

ここで本作品に戻ると、テディとデミアンは IRA に所属しているが、テディがアングロ・アイリッシュ的な人物、すなわち国際主義・世界主義の立場に立ち、上流階級の思考に近い思考を持っており、一方のデミアンは、ゲーリック的な人物、すなわち民族主義・地域主義の立場に立ち、あくまで貧困な労働者の味方であり続けようとする立場の人物として描かれていることがわかる。この違いは物語の随所に現われるが、次の 2 つを場面は特に両者の差異を明確に表している場面である。

まずは、英愛条約後の話し合いの場面である。カメラに対するテディとデミアンの位置関係としては、テディは政治家の側に座っており、彼らを囲む形でデミアンを含む条約反対派が座っている。そしてテディは次のように述べる。“Ireland is this tiny dot in a much bigger picture.” この言葉から読み取れるのは、テディが既にアングロ・アイリッシュ的な

---

ナショナリズムが生まれるのはこうした状況からなのだと、堀越は分析している<sup>46</sup>。堀越前掲『IRA アイランド共和軍—アイランドのナショナリズム—』48 頁

<sup>46</sup> 堀越、同上、48 頁、1719 年の宣言法でイギリス議会に完全に従属していたアイランド議会では、プロテスタントの支配が既に確立しており、次々とカトリックの権限を剥奪する立法を行っていた。そのため合併によってカトリック解放が実現するだろうと信じていたカトリック貴族や司教たちは、カトリック刑罰法の軽減を勝ち取るために合併を歓迎した。堀越、同上、43 頁

<sup>47</sup> オフェロイン、前掲書、5 頁

<sup>48</sup> ジョゼフ・リーは、内戦における分裂を端的に以下のように書いている。「内戦は表面的には条約を、特に忠誠宣誓をめぐって戦われた。しかし、条約は内戦のきっかけに過ぎず、原因ではなかったのである。その原因となったのは、多数決の権利と聖なる権利とがナショナリストの主義において根本的対立をきたしたことであった。」この多数決の権利とは、アングロ・アイリッシュ的な多数派の意見を指し、聖なる権利とはゲーリック的な民族主義的意見を指す。

思考として、アイランドを英国の一部と考えていることである。これに対してデミアンは条約に批准すれば完全な自由は得られないとし、その理由を次のように続ける。“This treaty will copper-fasten the hold of the powerful over the poor because there will be a governor general who'll have our puppet parliament on a leash. It'll be business as usual, with workers tied to a shift at a factory and fellas begging for jobs.” ここから、デミアンが一貫して労働者の側に立ち主張を続けていることがわかる。

もうひとつの場面は教会の場面である。この場面では、富裕層に味方する神父やテディと労働者層に味方するデミアンの対立が描かれている。まず、教会の中の場面で選挙は人々の支持の表れだとする神父に、デミアンが神父に反論する。“This is not the will of the people. It is the fear of the people. And once again, the Catholic Church, with honourable exception, sides with the rich!”

そして、出て行けと言われたデミアンをテディが追いかけて、次のような会話が繰り返される。

Tedy: You're fighting with the priest? Is it not bad enough we're fighting amongst ourselves?

Demian: There's one in four people out of work in this country. I have seen children and families starving. You've always been a dreamer.

Tedy: I am not a dreamer, I am a realist.

Demian: This treaty, Teddy, this treaty makes you a servant of the British Empire. You have wrapped yourself in the fucking Union Jack.

つまり、デミアンは失業者や飢餓の子供たちのために、英国からの完全な独立は必須だと考え、その上でテディを英国の手下に成り下がったと批判する。一方、テディは神父と対立するデミアンを批判し、自分は現実主義的に考えて、条約に賛成しているのだと主張する。

上記の場面を通して、テディとデミアンが兄弟でありながらも、階級意識や宗教観において異なるアイデンティティを持つものとして描かれていること、そしてそれらが、当時のアイランド内における階級と宗教の問題を反映していることが示されたと思う。

### 第3章 革命的ナショナリズムの源流

第3章および第4章では、ナショナリズムについて取り扱う。

本作品の中心人物であるデミアンとテディは、ヨーク地方のアイランド義勇軍であるが、本作品において両者は、アイランド義勇軍以前のイデオロギーの流れをも表象していると考えられる。そこで本章は、堀越の革命的ナショナリズムの系譜を軸に据えながら、主要なナショナリストと兄弟の言動を比較検討し、兄弟の表象が意味するものを探っていく。

まず、堀越の革命的ナショナリズムとは何かについて説明する。

堀越によれば、18世紀以降のアイランドには、自治主義のナショナリズムと、完全独立を主張する分離主義のナショナリズムがあった<sup>49</sup>。そして後者のナショナリズムは、堀越に「革命的ナショナリズム」と名付けられ<sup>50</sup>、19世紀半ばから本格化した英国に対するアイランドの民族革命の礎となった。これらは、フィニアン<sup>51</sup>、シン・フェイン<sup>52</sup>、アイランド社会共和党 (ISRP) <sup>53</sup>という流れの中で、継承・発展していき、アイランド義勇軍 (IRA) の時代の英愛条約によって分裂する<sup>54</sup>。

このような分離主義のナショナリズムにおいて、分裂が起こった背景には「独立」そして「共和国」の意味の捉え方がナショナリスト毎に異なることにあった<sup>55</sup>。彼らの中で「共和国」とは、ナショナリズムのシンボルというべきものであった。しかし、その「共和国」が、独立国の実態を意味するのか、字義通りの共和政体なのか、という点について二分されたのである<sup>56</sup>。独立国としての地位と共和国という政体は必ずしも一元化されていなかった。条約支持派は実質的独立国の地位、すなわち自由国を支持し、反対派が共和国の実現に固執した結果、内戦に至ったのである。

この「共和国」に対する解釈の祖語と分裂の様相は、本作品においても表されている。英愛条約後のIRAの話し合いにおいて、条約反対派が “I'm a Republican. And the only question I want you to answer is, are you men of your word? Do you expect me to answer that? Are you a Republican?” と述べると、条約賛成派が “Of course I'm a Republican!” と反論し、それに対し条約反対派が再び、“Bloody liar.” と反論するのである。

49 堀越、前掲『アイランドの風土と歴史』、86頁。堀越は本書において分離主義をセパラティズムと表現。

50 同上、86頁

51 同上、93頁

52 同上、106頁

53 同上、108頁

54 同上123頁

55 森、前掲『アイランド独立運動史—シン・フェイン、IRA、農地紛争—』、20-22頁

56 同上、119頁

さて、革命的ナショナリズムに話を戻すと、堀越によれば、第一の革命的ナショナリズムは、フィニアンである<sup>57</sup>。1858年、オドノヴァン・ロッサ (Jeremiah O'Donovan Rossa、Diarmaid Ó Donnabháin Rosa、通称：オドノヴァン・ロッサ、実名：ジェレミア・オドノヴァン、1831-1915) によって始まったフィニアン運動をきっかけとして、フィニアン (Fenian、Fenian Brotherhood、IRB、Irish Republican Brotherhood、アイランド共和主義者同盟) は設立された<sup>58</sup>。フィニアンとは、古代ケルト人の部族軍団の名称であり、「アイランドの侍」と呼ばれほどの死を恐れない戦闘性が、英国人から恐れられていた<sup>59</sup>。そしてフィニアンは、67年蜂起の際に、「現在、少数の権力者によって所有されているアイランドの土地は、私たちアイランド人民の属するものであり、それは私たちに変換されなければならない<sup>60</sup>」として共和国宣言を発表する。フィニアンの特徴は、フィニアン以前の組織にしばしば用いられた「秘密結社」という呼称を使用せず、「樹立された共和国」とすることで合法的な軍事組織であることを主張した点にあった<sup>61</sup>。

その入会の宣誓文は以下の通りであり、この文においても **government** という文言が使用されている。

(Name in full) Solemnly swear by all the wrongs inflicted on Ireland, and on my Irish Ancestors by England, that I will labor while life is left, to rid Ireland of English Government, that I will to the best of my ability, and the men at home to put themselves in a state of preparation to fight England and that my contributions to this organization will be for that purpose alone, I furthermore solemnly swear that I will always strive to act as a faithful brother of the organization, and that I will in everything consistent with the constitution be obedient to its governing body, SO HELP ME GOD.<sup>62</sup>

民族政府の樹立を目標とする軍事組織という点で、本作品においてテディとデミアンが所属する IRA は、明らかにフィニアン主義の流れを汲んでいた<sup>63</sup>。また非常に人民戦線的な、幅広い主義を含んだ同盟であるという点でもフィニアン的であった。

さて、本作品に話を戻し、テディとデミアンの苗字である O'Donovan に注目したい。前

<sup>57</sup> 森、前掲『アイランド独立運動史—シン・フェイン、IRA、農地紛争—』、90頁

<sup>58</sup> 鈴木、前掲『IRA アイランド共和軍—アイランドのナショナリズム—』、75頁

<sup>59</sup> 堀越、前掲『アイランドの風土と歴史』、90頁。

<sup>60</sup> 同上、95頁

<sup>61</sup> 同上、93頁

<sup>62</sup> *Fenian Brotherhood Commitment to the Cause*, ACUA - The American Catholic History Research Center and University Archives., <http://cuexhibits.wrlc.org/exhibits/show/irishnationalism/fenian-brotherhood-records-and/fenian-brotherhood-commitment>

<sup>63</sup> 堀越、前掲『アイランドの風土と歴史』、115頁

述の通り、フィニアン（Finnian）の創始者はジェレミア・オドノヴァン、別名オドノヴァン・ロッサである。ロッサの名前の由来の一つは、先祖がコーク州のロス・カーバリー出身だからだと言われている<sup>64</sup>が、本作品の兄弟がコーク州出身で、かつ苗字がオドノヴァンであるのは、彼を意識したからだろうと考えられる。すなわち、本作品においては、オドノヴァンの苗字を共有していることが、兄弟のイデオロギーがフィニアン的に一致していることを示していると考えられる。しかし、その後の活動を通して、フィニアニズムが分裂していったように、彼らのイデオロギーもまた分裂してくるのである。

---

<sup>64</sup> 堀越、前掲『アイランドの風土と歴史』、96頁



#### 第4章 革命的ナショナリズムの分裂 グリフィスのナショナリズム

前章までで指摘したようにフィニズムを共有していた兄弟は、テディが表象するグリフィスのナショナリズムと、デミアンが表象するコノリーのナショナリズムという分裂を起こす。

そこでまずは、第二の革命的ナショナリズムに含まれる、グリフィスのナショナリズムについて説明する。

堀越によれば、第二の革命的ナショナリズムはシン・フェイン (Shin Féin) である<sup>65</sup>。シン・フェインは、ゲール語でわれら自身という意味であり、1905年フィニアンをやめたアーサー・グリフィス (Árt Ó Gríofa, Arthur Griffith, 1871-1922) のもとで創設された<sup>66</sup>。ドイツの国民経済学者リストの影響を強く受けたグリフィスは、アイランドが自らの経済活動を持ち、経済的に自立することが何より重要だと考えていた<sup>67</sup>。したがって、グリフィスのシン・フェイン政策の基本は経済的自立だった。

経済的自立のためにはまず、民族の議会と政府を持たなければならない、とグリフィスは考えていた。しかしそれは、これまで自治主義者が言ってきた自治議会や自治政府とは違い、もっと大きい権限を持つものでなければならない。そのモデルとして彼が取り上げたのが、オーストリア・ハンガリーにおけるハンガリーの地位であった。したがって、当初のシン・フェイン党は、英帝国＝アイランドの二重統治を認めるような穏健派であった<sup>68</sup>。

当然グリフィスは条約賛成派であった<sup>69</sup>。彼は英帝国の君主権を肯定しつつ、英国議会と同等の権限を持つアイランド議会を設立しようとした。彼は、条約に対して、以下のように述べている。「これは1172年以来、アイランド政府とイングランド政府の代表団の間で、対等に調印された初の条約である。これはアイランドを対等と認めた初の条約なのである<sup>70</sup>」。彼は、アイランド自由国が、経済・外交において実質的独立国の地位を獲得し、そのことにより即時実現される経済・政治的国家利益を重視していた。

たとえ条約が、多数の人々の闘ってきた完全独立を実現するものではないとしても、それはアイランドの権限を大巾に実現しているといえるというのが、彼の主張であった。こ

<sup>65</sup> 堀越、前掲『アイランドの風土と歴史』、106頁

<sup>66</sup> 同上、107頁

<sup>67</sup> 同上

<sup>68</sup> 鈴木良平『アイランド建国の英雄たち—1916年復活祭蜂起を中心に—』彩流社、2003、78-79頁。シン・フェインは、復活祭蜂起以後、民衆の圧力に押されて、表面的には急進的な共和主義政党として生まれ変わっていった。このシン・フェイン党支持の背景には、シン・フェイン党の内実に対する支持というよりもむしろ復活祭蜂起の精神に対する支持であったと鈴木は分析する。

<sup>69</sup> 鈴木、前掲『アイランド建国の英雄たち—1916年復活祭蜂起を中心に—』、360頁

<sup>70</sup> Dáil Éireann, 19<sup>th</sup> December 1921

の条約決定は「最終的なものではない。われわれが地球上の最後の世代であると言えなのと同じ」<sup>71</sup>であり、そしてまた、「マイケル・コリンズが自由を獲得する自由<sup>72</sup>と呼んだものを実現」するのだと述べた。

パトリック・リンチは著書の中でグリフィスについて推測ではあるものの次のように分析している。グリフィスはおそらくアイランドが条約を拒否した場合の、イギリス首相ロイド・ジョージの脅しを考えたのだ。彼は、はるかに強大なイギリス軍に対するアイランド人のゲリラ戦が、エネルギーを失ってきているというコリンズの確信に左右されたのだろう。現実的なグリフィスは、アルスター地方の一部がアイランドの他の部分から分離してしまった事実、イギリス政府の交渉をこれ以上続けても、実質的に自体が変化する可能性がないという認識に特に影響されていたに違いない<sup>73</sup>。

上記のような経済重視、実質的な権限重視、現実主義的の革命的ナショナリズムを、グリフィスのナショナリズムと名付け、フィニアニズムから枝分かれした流派と捉える時、本作品のテディが上記のグリフィスに対応する主張を作品内で行っていることに気が付く。それは特に、以下の3つの場面で顕著である。

まず始めに、裁判の原告のお金を武器の購入費用に充てようとする場面である。有罪が下された原告を外に連れ出そうとするテディに、デミアンは“**This is a Republican court, not an English court.**”と共和国としての裁判を尊重すべきだと主張する。それに対してテディは、“**Do you want every merchant and businessman up against us? I need the man's money to buy weapons. We can't fight a war without weapons. He provides us with money to buy weapons. We have men on the four corners of this town defending this town.**”と、裁判よりもむしろ武器を購入するお金、経済の方がより重要だと主張する。そして、再度デミアンはこう反論する。“**We should enforce the court's decision. We have one objective, to get the British out of Ireland. And the Sweeneys of this world give us rifles, we're still the same as the English. you sure as hell better respect this court. This is our government.**”

<sup>71</sup> 鈴木、前掲『アイランド建国の英雄たち—1916年復活祭蜂起を中心に—』、360頁

<sup>72</sup> Treaty debates, 19th December 1921

この中でコリンズは条約自由について述べている。もしわれわれの生活向上のために必要だとするならば、そしてもしわれわれが独立独歩ではやっていけないとするならば、何らかの連合に加わる以外に道があるだろうか。コリンズは、本国と対等な地位を確立しつつある既存の自治領諸国にアイランドが加わることによって、将来的に完全な独立、すなわちブリテンと対等な国家の実現が可能になると述べたのである。「条約は、完全な自由を達成するための自由」すなわち、その最終目標が共和国の実現にあったという点では、条約反対派と何ら変わりはない。鈴木、前掲『アイランド建国の英雄たち—1916年復活祭蜂起を中心に—』、360頁

<sup>73</sup> 同上、361頁

上記の場面には、経済重視のテディの思想がよく表れている。そしてこの場面は、兄弟の明らかなナショナリズムの違いが、少なくとも観客の知る限り初めて提示される場面である。テディはたった一回のアイランド共和国による初の民主的な裁判という目に見えない価値よりも、明らかに公が利益を享受できる武器を重視した。一方でテディは英国からの「自由」への第一歩、それも労働者に寄り添った「自由」という目に見えない価値を重視した。このような、テディに対するデミアンの反論は、実際グリフィスに反感を抱いた当時のナショナリストたちの主張でもあり、次章で扱うコノリーのナショナリズムに繋がっていく。

次に、英愛条約後のIRA内の話し合いの場面を採り上げる。テディは頑なに条約を認めようとしないうテディ達に、次のように説得しようと試みる。

"Immediate and terrible war." Those were the exact words. The threat promised by the British Cabinet if we didn't ratify this treaty. Lloyd George, Churchill, Chamberlain, Birkenhead, Hamar Greenwood. A bunch of more vicious bastards in the one room you can't imagine. They have just watched 17 million men, women and children die in the Great War. You think they'll give a damn about a few thousand dead Republicans?"

"Lloyd George is in a coalition with die-hard Tories. As far as they're concerned, do you seriously think they'd let him give the green light to nationalists in India and in Africa and the whole fucking empire by giving us complete independence? It was never going to happen that way, and you all know it."

すなわち彼は、パトリック・リンチがグリフィスに推測したような、現実主義的思考によって、ロイド・ジョージを筆頭とする英国政府の巨大な力を恐れ、これ以上アイランドが抵抗を続けても事態が悪化するだけだと考えている。彼は最初から完璧で完全な独立を得ることは諦めており、それよりも一定程度の権限を得た好機を逃すべきではないとしているのだ。

そしてこの、「条約は最終的なものではない」「自由を獲得するための自由」という考え方も、次に採り上げる協会の場面で明らかになる。彼は、自分から離れていくデミアンに対して、次のように述べる。"I need you with me on this, Damien. We'll tear up the treaty once we're strong enough, but I need you to be with me on this." どれほど条約を変えられると考えているのかは作中では明らかにされていないが、非常にグリフィス的な発言であることは間違いないだろう。

本章で明らかになったように、政治的イデオロギーにおけるテディはグリフィスのナショナリズムを表象している。この、多数決的経済主義、実質的な権限主義、現実主義に対抗するのが、労働者目線の民族主義、社会主義を掲げる、コノリーのナショナリズムである。

第5章 革命的ナショナリズムの分裂 コノリーのナショナリズム

本章で扱うのが、第三の革命的ナショナリズムに属する、コノリーのナショナリズムである。

堀越によれば、第三の革命的ナショナリズムは、社会共和党 (ISRP)<sup>74</sup>である。社会共和党は、1896年、ジェームズ・コノリー (Séamas Ó Conghaile、James Connolly) によってダブリンに誕生した。ジェームズ・コノリーは、貧しいアイランド系労働者の子として育ち、その生い立ちから独立戦争から内戦にかけては、一貫して労働者の立場からの主張を続けた。彼は、古代共産制時代からのアイランドにおける労働者階級の闘争の精神を受け継ぐ民族主義者・社会主義者であり<sup>75</sup>、このような彼の思想は、次の有名な言葉に集約される。すなわち、“The cause of labour is the cause of Ireland, the cause of Ireland is the cause of labour<sup>76</sup>” という思想である。

彼はまた、彼の最初の著作である *Erin's Hope : The ends and the means* (1897) でも次のように語っている。“The Irish working class must emancipate itself, and in emancipating itself it must, perforce, free its country. <sup>77</sup>” “The Irish working class were “the only secure foundation on which a free nation can be reared” and in so acting, were not acting against the interests of Labour worldwide but working out their salvation on the line best suited to them.<sup>78</sup>” すなわち彼は、労働者階級がアイランドの自由を獲得することこそが重要だと考えていた。

さて、本作品のテディに表象されるコノリーのナショナリズムを検討する前に、コノリーを含む条約反対派の共通意見について、説明する。

条約反対派の主たる主張は2点あった。第一に完全な独立ではなく、議員宣誓に国王への忠誠が含まれる点において共和国の国王と相矛盾するという点、そして北アイランドの分離は北のカトリックを見放すことであり、国家が分断されることは避けなければならないという点である。

<sup>74</sup> 堀越、前掲『アイランドの風土と歴史』論創社、108頁

<sup>75</sup> 鈴木、前掲『アイランド建国の英雄たち—1916年復活祭蜂起を中心に—』、3頁。彼は、同時にサンディカリズムに傾斜し、社会主義と民族主義を結び付けた独自の思想をもつ人物でもあった。コノリーが友人に宛てた手紙によれば、サンディカリズムとは「労働者が生産の段階では最強であり、彼らは経済力以外には利用できる力を持たないこと、そして革命運動を職場、製粉所、造船所、工場の毎日の闘いと結びつけることによって、必要な経済力が組織される、という発見にすぎない。また、その目的に必要な革命組織は社会主義共和国の和釘井を与えるという発見でもある。」としている。

<sup>76</sup> James Connolly, *Peter Berresford-Ellins, Selected Writings*, (Pluto Press, 1997)p. 145.

<sup>77</sup> James Connolly, *Erin's Hope : The ends and the means* (Irish Socialist Republican Party, 1897), p.23

<sup>78</sup> *Ibid.*

前者の点について、条約反対派のデ・ヴァレラは次のように述べている。

「この条約はアイランドにおける支配権を確立するものである。忠誠宣誓はあくまでもブリテン連邦市民としてのみ行うというが、アイランド憲法への忠誠も求められている。そして、その憲法は、グレート・ブリテンの国王をアイランド願主とするものになるのだろう。共和国の議員たちがアイランド国民に頼って共和国と矛盾するこのような行為を行うならば、彼らは共和国を破壊させることになる（中略）我々はこの時代に、この最も恥じるべき条約にわれらの名前を記すことで、全世界にアイランド人をさらし者にするのか<sup>79</sup>。」

この屈辱感は、当時の条約反対派に共通する心情であったことであろう。第1章でも述べたように、イングランド人とアイランド人は違うという意識を、とりわけ強烈に有していた民族主義者にとって、英国王への忠誠は耐え難いものだったことは想像に難くない。

また、条約賛成派に対する条約反対派の怒り、特に社会主義思想の条約反対派の怒りは、次のような文章から端的に読み取れる。これはアイランド共産主義機構が雑誌に掲載した文言である<sup>80</sup>。

「アイランドの民族革命は民主革命ではなくなった。すなわち彼らは独立したアイランドで支配階級になることを望んでいたのである。彼らは1916年の宣誓でうたわれた完璧な民主革命を望まなかった。そのような革命はアイランド人民大衆を真直ぐに革命行動に引き入れることになるのだった。それは財産所有を終わらせ、アイランドにおける帝国主義の財産を没収し、その所有権を人民に移すことになるはずだった。そのような革命が完璧に成功したならば、アイランドにおける資本主義発展の基盤が破壊され、社会主義の基礎が築かれるはずだった。それゆえに民族ブルジョワジーの回利益は、民主革命を民族革命の重要部分とせずそこから切り離し、鎮圧することを要求したのである。民主革命の課題は、『民族的な性格も軍事的な性格も持つものはない』と主張され、抑えられたのである。これが民族革命を失敗させたのだった。<sup>81</sup>」

以上が、労働者重視の民族主義、そして社会主義のコノリーのナショナリズムの様相である。そしてこのコノリーのナショナリズムを表象しているのが、本作品におけるデミアンである。デミアンのコノリーのナショナリズムは、本作品の随所に見受けられるが、最も重要であるといえるのが、次の2つの場面である。

まず、本作品において、最初に Connolly の名前が出るのが、次の獄中の場面におけるダンとの会話である。

<sup>79</sup> *Dáil Éireann, 19th December 1921*

<sup>80</sup> P. ベアレスフォード・エリス著、堀越智、岩見寿子訳『アイランド史[下]—民族と階級—』、論創社、1991、150頁

<sup>81</sup> 同上

Demian: Were you in the Citizen Army? With Connolly?

Dan: Oh, yeah.

Demian: Did you ever hear him speak?

Dan: (前略) He set the place alight. "If you remove the British Army tomorrow and hoist the green flag over Dublin Castle unless you organise a socialist republic, all your efforts

will have been in vain." "And England will still rule you through her landlords, capitalists, and commercial institutions."

Demian: Thank you, Mr Connolly. I used that once in a debate at university. Jesus, I was all talk. And when it came down to it, I always had an excuse.

この場面から分かるように、ダンとの会話によってコノリーの思想がはっきりと観客に示され、それに対して好意的なデミアンの姿が描かれている。デミアンはコノリーの思想を間違いなく知った人物として設定されており、コノリーのナショナリズムへの伏線と捉えることができる。

さて、デミアンの労働者階級への関心、失業者や飢餓の子供たちに対する関心は、既に前章まで、特に第2章で述べた通りであるためここでは割愛する。

そこで最後に採り上げるのが、デミアンが条約反対派である理由を明快に示す次の場面である。英愛条約後のIRA内の話し合いで、条約賛成を訴えるテディらに対して、デミアンは以下のように主張する。"If we ratify this treaty, we will destroy the two most precious gifts that we won with this last election. One, being a mandate for complete freedom, not a compromised freedom. The second, being a Democratic programme in which is enshrined the priority, the public welfare over private welfare." すなわち彼にとっては、完全な自由を獲得できないのと同じくらい、個人の利益よりも公の利益が優先することが許せないのである。彼にとっては、「労働者」が「完全な自由」を獲得することが重要なのだということが、本場面で強く再確認されるのである。

本章で明らかになったように、本作品においてデミアンはコノリーのナショナリズムを表象する人物として描かれている。そしてまた、労働者階級に寄り添う映画をつくるケン・ローチの作品らしく、一見すると本作品はグリフィスのナショナリズムよりも、コノリーのナショナリズムが、より人情味のある尊ばれるべきナショナリズムであるかのように描かれている。しかし、ケン・ローチは本作品を通して、実際にそのような主張をしたかったのだろうか。これについて終章で検討を行う。

終章

独立闘争と内戦の物語は、アイランドの人々にとってきわめて切実で等閑視できない事実となっている。本論文を通して、本作品自体が、枝分かれしていったアイランドナショナリズムの壮大な地図となっていることはお分かりいただけたと思うが、アイランドのアイデンティティの分裂、そしてイデオロギーの分裂、という両分裂は、未だアイランドで統一・統合されたことはない。今日でも、「共和国」が問題にされる度に、内戦で表面化した階級的亀裂、宗教的亀裂、そして政治的亀裂が必ずしも消え去っていないアイランド社会の現実が表面化してくる。

本作品は、デミアンが *"In time, look after Teddy. I'm afraid, inside, he's already dead."* と述べ、そしてテディがデミアンを銃殺するという流れで終わりを迎える。仮に、テディがグリフィスのナショナリズムを表象し、デミアンがコノリーのナショナリズムを表象しているとすると、この終わり方はどのように考えるべきだろうか。本論文は、実はこの問いから始まっている。

コノリーは、第一次世界大戦に際して、次のように述べたとされる。「戦争にどんな価値があるのか、民族が犠牲を払わなければならないほどの価値が<sup>82</sup>。」これと同様の発言を、本作品内でデミアンが発する。*"I studied anatomy for five years, Dan. And now I'm going to shoot this man in the head. I've known Chris Reilly since he was a child. I hope this Ireland we're fighting for is worth it."* そして自らの言葉に答えるように、映画の終盤でデミアンは語るのである。*"Dan once told me something I've struggled with all this time.*

*He said it's easy to know what you're against, quite another to know what you are for. I think now, I know, and it gives me strength."*

本作品では、「何のために戦うのか」に対するデミアンの答え、デミアンを通じたケン・ローチの答えは明確になっていない。それは、一見すると労働主義的思想で結論したかのように思われるが、しかしケン・ローチが最後に両者を殺したことの意味を、次のように考えることはできないだろうか。

実際の死ではないにしても最初に殺されたのがテディであるということには、労働者階級や貧困層をおざなりにして、一部の者が富み、公の多数の利益が優先される資本主義社会に未来はないという、グリフィスの思考に近い現代の資本主義社会への反発と悲観と読み取れる。しかし、この後に実際に殺されるのがデミアンであることから、一方でこの社会で弱者として死んでいくのはやはり労働主義者であり、資本主義への真っ向からの反発は成功しない、結局心が死んでようとも実際に生きているという点で生き残るのはグリフィス的人々なのだという、現実的なメッセージも読み取れる。コノリーのナショナリズムは人間として素晴らしい価値観ではあるが、それを一貫して主張した先に待っているのは、

死である。この分裂が継続する先に未来はない。それが、一貫して労働者階級に寄り添ってきたケン・ローチが、この映画を通して訴えたかったことではないだろうか。

最後に、本論文が、終章を除いて、細谷雄一研究会に提出した自筆の卒業論文と同様のものであることをお断りする。



参考・引用文献一覧

<日本語文献>

- 後藤浩子ほか『比較経済研究所研究シリーズ 24 アイランドの経験—植民・ナショナリズム・国際統合—』法政大学出版局、2009、(第1章 田中美穂「中世アイランドにおける「ネイション」意識」、第9章 清水由文「アイランドの家族とアイランド人移民の家族」、第12章 森ありさ「自治から共和主義への転換点」)
- 森ありさ『アイランド独立運動史—シン・フェイン、IRA、農地紛争—』論創社、1999
- 堀越智『アイランドの風土と歴史』論創社、1982
- T・W・ムーディー、F・X・マーチン編著、堀越智訳『アイランドの風土と歴史』、論創社、1987
- P.ベアレスフォード・エリス著、堀越智、岩見寿子訳『アイランド史[下]—民族と階級—』、論創社、1991
- 鈴木良平『アイランド建国の英雄たち—1916年復活祭蜂起を中心に—』彩流社、2003
- 鈴木良平『IRA アイランド共和軍—アイランドのナショナリズム—』彩流社、1999
- ヘルマン・ヘッセ著、高橋健二訳『デミアン—エーミール・シンクレールの少年時代の物語』 岩波文庫、1939
- テレンス・ブラウン著、大島豊訳『アイランド—社会と文化 1922-85年—』、国文社、2000
- 松尾太郎『アイランド問題の史的構造』、論創社、1980
- 松尾太郎『アイランド民族のロマンと反逆』論創社、1994
- オフエイロン著、橋本楨矩訳『アイランド—歴史と風土—』岩波書店、1993
- 原聖『ケルトの水脈』講談社、2007
- プロインシャス・マッカーナ著、松田幸雄訳『ケルト神話』青土社、1991
- 池上正太『ケルト神話』新紀元社、2011
- 桑島秀樹『生と死のケルト美学—アイランド映画に読むヨーロッパ文化の古層』法政大学出版局、2016
- 加藤幹郎監修、杉野健太郎ほか『映画とネイション』ミネルヴァ書房、2010
- 田中美穂「12世紀後半アイランドへのノルマン侵攻—ディアルミド・マクムルハダニヨルストロングボウ招喚」『エール』第25号、日本アイランド友好会、2005
- 山田幸代『理想の空白性—映画『マイケル・コリンズ』(1996)と『麦の穂を揺らす風』(2006)が表象するアイランドのナショナリズム—』南山英文学(32)、南山英文学会、2008

<英語文献>

- Paul Laverty, *Wind that Shakes the Barley, The: A Screenplay*, Galley Head Press, 2006
- Sean O'Faolain, *The Irish*, Penguin Books Canada, 1969

- David Damrosch, *The Longman Anthology of British Literature: The Twentieth Century*, The Longman Anthology of British Literature. Longman, 2011
- Bert Cardullo, *Loach and Leigh, Ltd.: The Cinema of Social Conscience*, Cambridge Scholars Publishing, 2010
- Anthony Storr, *Jung*, HarperCollins, 1973
- R.A.S. Mascalister, Lébor Gabála Éirenn: *The Book of the Taking of Ireland 5 vol*, Irish Texts Society, 1993
- Patrick Sarsfield O'Hegarty, *A History of Ireland Under the Union 1801-1922*, Methuen, 1952
- Patrick Sarsfield O'Hegarty, *The Victory of Shin Féin*, University Colledge Dublin Press, 1924
- Ernie O'Malley, *On Another Man's Wound*, Mercier Press, 1936
- Ernie O'Malley, *The Singing Flame*, Anvil Books, 1978
- James Connolly, *Peter Berresford-Ellins, Selected Writings*, Pluto Press, 1997
- James Connolly, *Labour in Irish History*, Nabu Press, 1910
- James Connolly, *Reconquest of Ireland*, Nabu Press, 1915
- James Connolly, *Erin's Hope: The ends and the means*, Irish Socialist Republican Party, 1897
- Tom Barley, *Guerilla Days in Ireland*, Mercier Press, 1949
- Fenian Brotherhood Commitment to the Cause*, ACUA - The American Catholic History Research Center and University Archives.,  
<http://cuexhibits.wrlc.org/exhibits/show/irishnationalism/fenian-brotherhood-records-and/fenian-brotherhood-commitment>
- Teodore William Moody, *Irish History and Irish Mythology*, 1997
- Dáil Éireann*, 19th December 1921
- Treaty debates*, 19th December. 1921
- Dwyer Joyce, *The Wind That Shakes the Barley*, 1861